

題字 大島文雄先生



山梨県ケカチ遺跡出土の和歌刻書土器（甲州市教育委員会蔵）

総会記念講演

7/7(土) 総会 13:30~
講演 14:40~
場所 ボルファートとやま

土器に書かれた
平安時代の仮名について

鈴木 景二

2011年秋の総会で、富山県射水市の赤田Ⅰ遺跡から出土した草仮名墨書土器について紹介しました（会報・第33号）。その後、あの遺跡の背景が分かってきました。また、最近、全国各地から同じような資料の出土が相次いでいます。そこで今回は、まず赤田Ⅰ遺跡をめぐる新知見をお話しし、ついで昨年、山梨県甲州市ケカチ遺跡で見つかった和歌刻書土器を取り上げて、現在進行中の研究状況と意義についてご紹介いたします。考古学、日本史、古典文学がクロスする状況に触れていただきたいと思います。

8ページをご覧ください。

『人文』40号発刊に憶う 窪 邦雄

大正デモクラシーの申し子 野村 勲

人文同窓会会報誕生と推移 高畑史子

第3回 人文学部の歩み 入江幸二

裸足の蝶と白磁の太陽 藤本信介

研究室から／西洋史 入江幸二

研究室から／考古学 高橋浩二

人文の集い、総会、卒業祝賀会報告、新刊案内 他

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6142

E-mail：
alumni@hmt.u-toyama.ac.jp

『人文』40号発刊に憶つ

窪 邦雄（1回国文）



つたように覚えていた。高校二年から、あるいは三年を卒業してから新制の富山大学に編入した人たちには、在籍一年のぼくなどと違って、旧制富山高校とのつながりを求める気持が強かったのだ。

しかし、最終的には両者とも連結反対の意見が多く、合体的に決まった。これはぼくの推測にすぎないのだが、旧制高校の卒業生はほとんどが旧帝大卒なので、まだ海のものとも山のものともつかない新制大学に対する偏見もあっただろう。

つていた。それが、新しい同窓会の発足を機に、会長は卒業生から選ぶべきだ、という声が出て、副会長のぼくに会長が回ってきた。高校教員のぼくは、同窓会長というのは、政財界の成功者になるものと思っていたので固辞したのだが、大学の第一回卒業生ということもあって、最後は引き受けざるを得なかった。

同窓会の事業は、第一に会員名簿の発刊であり、年に一回の総会の開催がある。そのための理事会も年に二度ほどあったが、それらの案内や会計、会報の作成送付という仕事は、すべて事務局任せなので苦にはならない。ただ想定外だったのは、卒業祝賀パーティーの会長挨拶である。この挨拶がぼくには苦痛の種だった。卒業生は毎年違うが、列席される先生方は変わらない。一度ならともかく、二年三年と重なると、自分の無学不勉強が見透かされてしまう。それが怖かった。正月を迎えるともう三月の挨拶に頭を痛めたものだ。なんと十年近く務めた後、文学部部長の任期を終えていた本田弘さん（一回生）に、会長を引き受けてもらうことになったのは幸いだった。

この後の同窓会の充実ぶりは、会誌『人文』をみればわかる。「会報」が『人文』に衣替えしただけでなく、国内外の各分野で活躍する会員の寄稿が増え、先生方の文章からは啓発されるところが多い。理事会の中に編集委員会がきちんと位置づけられ、企画、原稿依頼、編集、校正に至る仕事がつかりされているからである。

「人文の集い」も早や六回を経て、年々定着してきた。年に一度の講師の話に、専門外の分野であれ、深い学識に支えられた研究に触れるのは大きな喜びである。また、この間、全学的にみても、富山大学同窓会連合会が発足し、ホームカミングデーも学部持ち回りで、学外とのつながりを深めている。ただ、会員名簿がプライバシーの問題があつて、完全な形で発行できなくなりつつあるのは、時代の趨勢とはいえない。

（富山市在住）

同窓会誌『人文』が四十号を数えるという。この号数は、多分まだ『会報』と呼ばれていた頃から数えての数字だろう。ぼくが同窓会長だったのはその『会報』の時代だったから、あれからすでに四十年、その前史にあたる文学部文学科同窓会も含めると、六十五年もの間なんらかの形で同窓会に関わってきたことになる。感慨なきを得ない。この機会に、同窓会にまつわる思い出のいくつかを記してみたい。

人かが会議室に呼ばれ、近く発足するはずの文学部同窓会と、旧制富山高校同窓会との関係はどう考えるかについて意見を求められた。他学部はすでに前身の富山師範、富山葉専、高岡工専の同窓会をそれぞれ引き継ぐことで合意しているという。文学部から独立した経済学部が、旧高岡高商・高岡経専同窓会と結びつくのも自明のことだった。文学部だけが、学内にも旧制富山高校同窓会側にも、両者の連結に賛否両論があり、結論が出ていない、ということだった。言われてみると、この時集まったメンバーは富山高校の出身者ばかりで、会を主導されたのは英文科の小森典先生だった。先生も富山高校の出身であり、両者の仲介役として臨まれていたのだ。二度か三度集まったと思うが、この会議では富山高校同窓会と一つになることに賛成する意見が多か

つたように覚えていた。高校二年から、あるいは三年を卒業してから新制の富山大学に編入した人たちには、在籍一年のぼくなどと違って、旧制富山高校とのつながりを求める気持が強かったのだ。

つていた。それが、新しい同窓会の発足を機に、会長は卒業生から選ぶべきだ、という声が出て、副会長のぼくに会長が回ってきた。高校教員のぼくは、同窓会長というのは、政財界の成功者になるものと思っていたので固辞したのだが、大学の第一回卒業生ということもあって、最後は引き受けざるを得なかった。

つたように覚えていた。高校二年から、あるいは三年を卒業してから新制の富山大学に編入した人たちには、在籍一年のぼくなどと違って、旧制富山高校とのつながりを求める気持が強かったのだ。



大正デモクラシーの申し子

―七年制富山高等学校の栄光―

野村 勲 (第23回文科甲類卒／最終回卒業)



歴史と自然を愛する会」が毎年春に南日初代校長を偲ぶ南日梅林の観梅会を催し、残り少ない我々卒業生にも声を掛けて戴くことが心の支えとなっている。

富山駅を降りると正面のC i Cビルに渡る横断歩道の脇に時計付きの三面塔が立っている。このクロックタワーに行き交う人はあまり関心がなさそうだがその足元の白いボタンを押すとピアノによるメロディが流れる。旧制富山高校の代表的寮歌「丘の団欒」だがほとんどの人は何のメロディかとげん顔になる。「旧制」とあえてつけなければ現在の富山高校との区別もつかない。それほど過去にかすむ存在となつてしまったことをしみじみ思う。

しかし、学び舎の跡が記念公園として残り「馬場記念公園の

る」を受けて第七條に「高等学校の修業年限は七年とし高等科三年尋常科四年とす」と定められた。旧制富山高校もこれに基づき七年制として設立された。

大正七年九月に発足した日本最初の平民内閣と云われた原敬の政友会内閣は西園寺公望の掲げた四大基本政策を實行するこ

ととした。その第一は教育施設制度の改善である。高等学校令の改正はその第一歩であつた。西園寺はかねがね明治二十三年制定の教育勅語を批判して「新時代の大国民は忠臣教育より良臣教育でなければならぬ」と主張し、教育勅語改訂案までつくつていた。教育を儒教的束縛に閉じ込めず広く世界的視野に立つべしと唱えた西園寺の思想は、原敬と同郷の新渡戸稲造にも受けつがれた。新渡戸は第一

高校の校長時代、その頃の第一高校に巣喰う孤高の籠城主義を払拭しようとしてデモクラシー(平民道)とソシアリティ(社交性ないし社会性)を説いた。原敬の高等学校令改正で意図したのはまさに英国のパブリック

スクールに範を求めた中高一貫の七年制の人格形成教育制度であつた。

高等学校令が改正された大正七年にはシベリア出兵が始まつた。それをきっかけに大陸侵攻の風潮が増大し軍備拡張が強調され始めた。原敬の政党内閣も

軍部の圧迫に押され教育関係予算は眞先に圧縮を余儀なくされるようになった。その為当初予定された官立七年制高等学校は東京高等学校一校にとどまり他の新設官立高校はすべて高等科三年制に押さえられた。七年制

高等学校の理念は設立基本財産五十万円を篤志によつて確保し得た公立私立七校に託せざるを得なくなつた。この時地方で唯一手を挙げたのが旧制富山高等学校である。馬場は氏の寄託は富山県教育振興のためと伝えられているが、教育史の大きな変遷の中でもう一度その意義が見直されてしかるべきと思つ

た。七年制高等学校の初代校長は、東京高等学校の湯原元一を始めとしていずれも大正デモクラシーのちに呼ばれる新しい理念に燃え、イギリスを範とする全人的紳士教育を採り入れようとした。南日初代校長もその一人として特筆される。

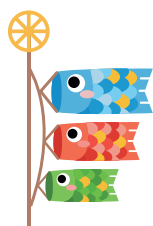
卒業生の回顧録「青冥万里」には南日校長の数々の訓話が記

されている。始業式には「自分は自由主義者であり今後もそれを目指とする。学校は本日より諸君を紳士として取扱うから、諸君もこれに心懸けて勉強され、学校の内外を問わず行動して欲しい」と述べた。「人間を尊重し人間の価値を認める」「人間の自己実現を妨げるものとは妥協しない」など生徒たちの心に深く刻み込まれる言葉を数多く残した。

学校開設五年後の昭和三年に南日校長は急逝された。生徒と岩瀬浜で水泳中の出来ごとである。痛恨極まりない。しかし、南日リベリズムは南日校長を慕つて富山に集つた教授たちやその教えを深く胸に刻みこんだ生徒たちによつてたくましく受け継がれた。寮歌を見ても他校に比べ自由をうたい上げた詩句が多い。

この旧制富山高等学校の七年制にこめられた理念が富山大学人文学部に確かに受け継がれることを願つてやまない。

(富山市在住)



人文同窓会会報誕生と推移

高畑 史 子（3回英文）



一九七八年（昭和五十四年）

「会報」第一号 発行

編集・題字 本田弘先生

用紙 B5サイズ 横書き

一九八九年（平成元年）

「会報」名を「人文」に変更

一九九〇年

大島文雄先生に会報「人文」

の題字の揮毫をお願いする

二〇〇七年

用紙のサイズをA4に変更

二〇一六年

表紙「人文」題字枠撤去、

「人文」の文字が表紙絵に混

在

思い返せば人文学部会の会報第

一号がつくられたのは昭和五十

四年、今から四十年前である。

その年の同窓会の理事会で初

めて今後年一回きちんと会報を

つくりという案が出た。それ

迄は本田弘先生が一人で同窓

会の予算や議事などの報告を一

枚の紙にまとめて理事会で配っ

て下さっていた。これからは会

報の形にして広く会員の意見な

ども載せようということになっ

た。担当は誰がいいかという話

になっている時、不用意に辺り

をボーッと眺めていたら男性理

事の一人と目が合い編集を任さ

れる羽目になってしまった。

会報というものにはそれまで

子供の小、中学校で係わってい

たので今更珍しくもなかったか

ら仕方なく一人で始めた。最初

は北日本印刷に知り合いがいた

ので印刷を頼むことにして事務

室の片隅で編集を始めた。翌年

からは理事の布村弘さんが手伝

うと云って下さり、私宅や喫茶

店のチェリオなどで読み合わせ

をしたものだった。数年後初め

て女性三人に編集に加わって頂

き嬉しかった。やがて男性の編

集委員も増え充実していった。

会報の題字は紙一枚の時から



文理学部跡碑竣工祝賀会 平成元年九月

本田先生の字であったが、やがて人文学部が出来て会報の名も

「人文」となった時、学部長の大島文雄先生に揮毫をお願いし

て見ようということになった。

先生は本当に快くお引受け下さ

り布村さんと感激して喜び合っ

た。現在に至る「人文」の文字

である。

大学時代大島先生の御講義や

御人柄に心から尊敬の念を抱き

懐かしい想い出を沢山もってい

る教え子がまだ大勢元気とい

る。「人文」の題字をどうか大

切にして頂き度いと思う。

（富山市在住）

研究室

から

西洋史

歴史文化コース准教授

入江 幸 二

西洋史分野は二〇一三年一〇月に入江（スウェーデン近世史）が着任し、毎年数名の卒業生を社会に送り出してまいりました。そして二〇一七年二月、南祐三准教授をお迎えすることができ、教員二名の体制となりました。南先生はフランス現代史が専門で、ナチス占領下のパリにおけるメディアを分析した著書『ナチス・ドイツとフランス右翼パリの週刊紙『ジュ・スイ・パルトゥ』によるコラボレーション』（彩流社、二〇一五年）で斯界の注目を浴びた気鋭の若手研究者です。

現在の研究室は、大学院生一名、学部の四年生七名、三年生十二名、二年生七名を擁しています。学生たちの研究対象はイギリス美術・古代ローマ・中近世イベリア半島・近世ドイツ・近代オーストリア・ロシア・オスマン・中南米・中世文化・海賊などに及

び、王道のテーマから個性的なテーマまで、互いに切磋しつつ幅広く学んでいます。また二〇一五年からは卒業論文集を作成しています。提出された論文を印刷・製本して卒業生へ向けたプレゼントにするとともに、一部を演習室で保管することで、後輩たちへの範となる卒業研究をするよう四年生に



発破をかけています。その影響も少しはあるのでしょうか、卒業論文では一次史料や欧語文献を駆使して執筆された力作が揃い、さらに自発的に欧語文献を読んで研究発表に臨む二・三年生も増えてきました。

ゼミの大きな行事として、西洋史実習にも力を入れています。入江が赴任した初年にオペラ「カルメン」を東京で観劇したほか、最近では東京や関西の美術館・博物館などを巡っています（写真は二〇一七年に神戸・異人館へ行った時のもの）。数時間にわたって事前学習を行い、泊りがけで複数の展覧会をまわるのはかなり負担もかかりますが、学生たちの勉強になるだけでなく彼らの結束を強める効果も生んでいます。

なお二〇一六年には西洋史分野のホームページを開設しました（<http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/seiyoshi/>）。更新頻度は高くありませんが、こちらもご覧いただければ幸いです。

裸足の蝶と白磁の太陽

—韓国映画の現場に生きる2—

藤本 信 介 (51回比較社会)



中山美穂主演の映画「蝶の眠り」が五月十二日に全

国で公開された。私はこの映画に監督補として参加した。

大学四年の二〇〇一年に交換留学生として韓国に渡った私は韓国映画に魅了された。そして、今でも韓国を拠点にして日韓合作映画の現場スタッフとして働いている。二〇〇七年に

も、この同窓会会報二十九号に寄稿させていただいたが、この十年間で様々な作品に参加した。今でも映画を続けられるのは、人生の力となる作品に出会えるからだ。そんな映画ベスト3を紹介したいと思う。

第一位「裸足の夢」。東ティモールの少年たちが広島で行われたサッカーの国際大会で優勝した、という実話を元にした映画だ。二十一世紀最初の独立国である東ティモールに撮影で行く前はこの国には何もないと諦

めていた。しかし、眩しいほどの子供たちの笑顔に溢れていた。撮影当時の二〇〇九年には自国の映画もドラマもなかったため、役者がいなかった。子供たちに一から演技を教え完成させたことは今でも大きな自信となっている。子供たちと再会を果た彼らに早く会いたい。

第二位「道(白磁の人)」。あの頃、何故、私は韓国で映画をやっているのかと悩む日々が無制限ループのように続いていた。そんな私を救ってくれたのは一九一四年に韓国に渡った浅川巧(たかみ)という実在人物の伝記小説だった。巧は韓国人を誰よりも愛し、韓国人に誰よりも愛された人物だった。この本を読んだ時、私は韓国映画よりも韓国人が好きだから韓国にいるのだとわかった。巧になりたいと思

った。その一年後、舞い込んだ作品がなんと巧を主人公にした映画だった。監督に言われた言葉が今でも忘れられない。「お前は平成の浅川巧だな」。

第三位「台風太陽 君がいた夏」。私が初めて参加した映画だ。「早く日本に帰れ！お前が辞めないなら俺が辞める！」先輩に毎日、怒鳴られた。当時は影で涙をぬぐったが、韓国語もままならない外国人を部下に持った彼らの苦労は今なら理解できる。彼らのしごきがあつたからこそ、何があつても負けない今の自分がいる。

二〇一六年に日本で公開されたパク・チャヌク監督の「お嬢さん」は今年、イギリスのアカデミー賞で外国語映画賞を受賞した。私はこの映画で助監督を務めた。有名監督と仕事ができて自慢げだった私の鼻をへし折り、初心に戻してくれたのが「蝶の眠り」だった。この映画の監督は「台風太陽」の監督なのだ。

私はスタッフをやり続けるために映画を始めたのではない。監督になりたいのだ。監督になるために、ここ一年は現場を離れ、シナリオを書いている。正気じゃドラマは生まれえない。今はすべてが不安な三十九歳。でも、来年はすべてが新鮮な四十代の新人。(ソウル市在住)

研究室

から

考古学

歴史文化コース准教授

高橋 浩 二

平成23年4月に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所から次山淳教授を迎え、教員2名体制で教育、研究活動にあたっています。平成29年度の在籍学生は、大学院2年生1名、学部4年生6名、3年生7名、2年生2名、合計16名でした。2年生が極端に少ないのは偶々で、近年は1学年6名前後で推移しています。10年以上前と比べて、人数もずいぶん落ちてきました。



毎年7月には、県外の遺跡や埋蔵文化財センター、博物館等を実際に訪問して学習する研究室旅行を行っています。3年生は前期の演習で、行先となる都道府県の遺跡や遺物の地域的特徴と歴史的背景を詳細に調べ、発表を通じて考古学の知識を飛躍的に増やしていきます。2年生とも協力しながら最終的にはパンフレットの形に仕上げ、研究室旅行に携行し学習成果と照らし合わせて、さらなる学習へつなげていきます。平成29年は滋賀県、平成28年は埼玉県、平成27年は福井県を訪問しました。

研究室で最も重要な活動といえは、8月に行う野外調査と思えば、平成13年から19年までは氷見市阿尾島田A1号墳とA2号墳、稲積オヤチ古墳群、平成20年、21年までは福井県永平寺町手繰ヶ城山古墳を調査しました。平成22年からは杉谷キャンパス内にある富山市杉谷古墳群の調査を開始し、平成23年までは杉谷6号墳の調査を行い、平成24年からは杉谷4号墳を継続的に調査しています。3年生の後学期の演習では、野外調査で発見した出土品の復元や図面作成、文章執筆などを行って成果をまとめ、翌年度には調査報告書として刊行し、全国の大学や博物館、また県内の図書館等へ寄贈しています。近年刊行のものは奈良文化財研究所ホームページの「全国遺跡報告総覧」でも閲覧できるので、ぜひ一度ご覧ください。

卒論のテーマは旧石器時代から近世までと相変わらず多岐にわたり、対象とする地域や資料もさまざまで指導するものもと苦労ですが、資料調査に取り組む学生の姿を見ると、こちらも力が入ります。

考古学研究室は来年2019年に、創設40周年をむかえます。卒業生・大学院修了生をあわせた数も320名を越えました。卒業生の皆様のご活躍は、教員や学生にとつても大変励みになります。最近は懇親の機会も少なくなりましたが、ぜひ気軽に研究室にお立ち寄りいただき、近況を聞かせて下さい。

報告

平成二十九年年度

同窓会総会

日時▽平成二十九年七月八日
会場▽ボルファート富山



総会では磯辺祐子新学部長と富山大学同窓会連合会会長(当時)の河合隆さん(21回国文)よりご挨拶をいただきました。議事では平成二十八年度事業報告と決算が了承され、平成二十九年度事業計画と予算案が審議され原案どおり承認されました。

引き続き役員人事案の協議に入り、林優奈さん(国際文化論)、田中冨香さん(中国言語文化)の二名が新しく理事となりました。役員名簿は人文学部同窓会ホームページに載せてあります。

次に同窓会名簿について協議しました。これまでの4年周期

の発行を見直し、卒業生の名簿を作成配布するという代替案が了承されましたが、その後様々な展開がありました。最終的には八頁の通りとなりました。記念講演は、人文学部中井精一教授による「ことばの広がり

と変化をとらえる」でした。人文学部の積年の方言研究の蓄積をまず紹介され、具体例も豊富に富山県を中心とした方言の諸相について楽しく拝聴しました。総会終了後は懇親会が開かれま

した。



報告

第六回

人文の集い

日時▽平成二十九年十月二十八日
会場▽富山大学人文学部



午前十時より、同窓生の河合隆氏(21回国文)より「インドに呼ばれて」と題する講演をお聞きしました。多様性と可能性に溢れたインドという国について興味深いお話でした。

その後の昼食懇談会では旧制富山高等学校同窓生の野村勲さんより「七年生高等学校の栄光と挫折」という資料が配布されたこと、全国でも珍しい七日制であったことの意義を語っていただきました。河合講師、磯部祐子学部長も交え懇談は和やかに続きました。

平成二十九年年度理事会報告

(平成二十九年年度)第二回

平成二十九年九月十六日

まず、十月開催の「人文の集い」の開催詳細について検討しました。引き続き懸案となっている同窓会名簿について協議しました。

(平成二十九年年度)第三回

平成二十九年十二月二十日

三十年度事業計画や同窓会名簿の発行について協議しました。

同窓会連合会報告

○十周年記念事業・総会

平成二十九年七月二十二日(土)、富山大学黒田講堂において富山大学同窓会連合会設立十周年記念式典及び記念講演会が挙行されました。

式典では河合隆会長が式辞を述べ、石井隆一富山県知事より祝辞を頂きました。引き続き古志の国文学館館長中西進氏による「日本文化の未来」と題する記念講演がありました。

平成二十九年年度連合会総会は富山電気ビルに会場を移して開催され、二十八年度事業、会計決算、監査の報告があり、二十九年度事業計画、会計予算、特別会計案が審議・承認された

後、新会長に寺林敏氏が選出されました。祝賀会では同窓会連合会より中尾哲雄氏、北野芳則氏、高井正三氏に感謝状の贈呈があり、和やかな懇談のうちに祝賀会を終えました。参加者総数は七十四名でした。

○ホームカミングデー

平成二十九年十月二十一日(土)、

富山大学杉谷キャンパスにて薬学部の担当により第十回ホームカミングデーが開催されました。各学部卒業生を迎えた中で遠藤学長から富山大学の現況と新学部の設立についての説明があり、薬学部細谷学部長からの挨拶に続いて薬窓会会長稲田裕彦氏による講演「中小製薬企業のおかれた環境と事業展開」がありました。

その後民俗薬物資料館、薬学部研究室などの見学があり、和気藹々とした雰囲気の中で懇親会が行われました。参加者総数は六十五名でした。

○平成三十年度連合会行事予定

七月十九日(木) 第十一回総会(富山電気ビルにて)

・九月三十日(日)

第十一回ホームカミングデー(五福キャンパス、工学部担当) なお、五月二十六日(土)にはゴルフ大会が予定されています。詳細は連合会ホームページをご覧ください。

富山大学准教授 入江幸二

六十名とされた。

一方で学生たちは高校生活を

柴山槐郎が校長を引き継ぎ、蜷川龍夫・小松原隆二・成田秀三・清水虎雄がその後を襲った。三三年十月には「富高創立十周年記念祭」が開催された。鳩山

（小松原は校長事務取扱）。だが一九三〇年代に日本が徐々に軍国主義へと傾斜すると、旧制高校も時代の波に翻弄されていく。

上大運動会、学生による演劇など

一九三八年から学生たちは農村などでの集団勤労作業に駆り出されることになった。一九四二年には修業年限が半年繰り上がり、翌年十一月には三十二名の出陣学徒を見送った。また国の理系重視の方針のもと理科を

どが催された。ことに赤祖父富雄（ペンネーム丸根賛太郎、のち映画監督）を中心に結成され

た映画研究会は映画会を主催、ソ連初の本格的トーキー「人生案内」などを帝国館で上映して好評を博し、それから富山でも

終戦後、大きな教育制度改革

が行われ、エリート教育の拠点とされた旧制高校は廃されることになった。旧制高校が終わるシヨックから、「高校の門標を下ろすとともに自決すべく家を出て、遂にその機会を失し未遂に終わった」教師までいたという。それほどまでに愛された旧制高校の衣鉢を継いだのが、一九四九年に誕生した新制富山大学の文理学部である。文学科（学生定員四十名）・理学科（同六十名）・経済学科（同八十名）の三学科体制、旧制高校があった蓮町で、新時代の人材育成を担うことになる。



新刊案内

人文学部ゆかりの方々の新刊を紹介します。

富山大学人文学部考古学研究室編刊 2016年11月

藤ひさし、田中聡（33回文化構造）著 河出書房新社刊 2017年2月

富山市八尾町の生活文化（地域社会の文化人類学的調査26）

藤本武、野澤豊一編著 富山大学人文学部文化人類学研究室刊 2017年3月

参加型GISの理論と応用 みんなで作り・使う地理空間情報

若林芳樹、今井修編著 大西宏治他執筆 古今書院刊 2017年3月

東アジアの交流と文化遺産 黒竜江・図們江流域の渤海遺産データ

藤井一二(12回史学)著 城西大学刊 2017年3月

地図学の聖地を訪ねて 地形図片手にたどる測量の原点と地理教科書ゆかりの地

松山洋編著 大西宏治他執筆 二宮書店刊 2017年4月

空間と時間の中の方言 ことばの変化は方言地図にど

大西拓一郎編 中井精一他執筆 朝倉

国際関係論へのファーストステップ
中村都穂著 鈴木昌幸郎他執筆 法律文化社刊 2017年5月

中村都編著 鈴木晃志郎他執筆 法律文化社刊 2017年5月
立憲研究から現代日本の批評を考える 批評・小説・ポップカルチャーをめぐって

文字研究から現代日本の批評を考える 批評・小説・
西田谷洋編 小谷英輔他執筆 ひつじ書房刊 2017年5月

西田谷洋欄 小谷英輔他執筆 OTCし書房刊 2017年5月
麻中を社会に活かす 楽しむ・学ぶ・伝える・観る

歴史学研究会編 南祐三他執筆 東京大学出版会刊 2017年5月

古文書料紙論叢

湯山賢一編 富田正弘他執筆 勉誠出版刊 2017年6月

和辻倫理学との対話

田畑真美著 栄光書房刊 2017年11月

杉谷4号墳 第5次発掘調査報告書

富山大学人文学部考古学研究室編刊 2017年12月

小説とは何か？ 芥川龍之介を読む（

小谷瑛輔著 ひつじ書房刊 2017年12月

安政飛越地震の史的研究－自然災害にみる越中幕末
高野 博彦（2010年歴史文化）著 林書三刊 2010年2月

高野靖彦（28回院歴史文化）著 桂書房刊
 宇山の祭り 町人 香篠輝ノ

富山の祭り＝町・人・季節輝く
阿南透 藤本武経 桂書房刊 2018年2月

阿南透、藤本武編 桂香房刊 2018年3月
人立知のカレイドスコープ (富山大学)

富山大学文学部編 桂書房刊 2018年3月

アヤンダ おおきくなりました。おんなのこ

ヴェロニク・タジョ文 ベルトラン・デュボワ絵 村田はるせ（50回仏文）訳 風濤社刊 2018年4月

卒業祝賀会

富山大学卒業式が平成三十年三月二十三日午前、挙行されました。午後からはホテルグランテラス富山で人文学部学位記授与式が執り行われ、引きつづいて同窓会主催の卒業祝賀会を開催しました。

会場は多くの盛装した学生や先生方で溢れ、華やかな雰囲気の中、卒業生の門出を祝福しました。



平成30年度人文学部 総会のご案内

ねばたまの月に向かひてほととぎす霍公鳥啼く音遙けし里遠みかも

暦の上ではすでに立夏、ほととぎすが里から遠くで月に向かっての啼く声を聞く。

大伴家持が天平19（747）年4月16日に詠んだ歌。今年は、大伴家持、生誕1300年にあたる。

本年度の総会を、下記の要領で開催いたしますので、多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。
人文学部同窓会長 米原 寛

日時 平成30年 7月7日(土) 総会 午後1時30分～ 講演 講師 人文学部教授 鈴木 景二
講演 午後2時40分～ 演題 「土器に書かれた平安時代の仮名について」
場所 ボルファートとやま（富山市奥田新町81 TEL076-431-1113）

講演要旨

2011年秋の総会で、富山県射水市の赤田Ⅰ遺跡から出土した草仮名墨書土器について紹介しました（会報・第33号）。その後、あの遺跡の背景が分かってきました。また、最近、全国各地から同じような資料の出土が相次いでいます。そこで今回は、まず赤田Ⅰ遺跡をめぐる新知見をお話し、ついで昨年、山梨県甲州市ケカチ遺跡で見つかった和歌刻書土器を取り上げて、現在進行中の研究状況と意義についてご紹介いたします。考古学、日本史、古典文学がクロスする状況に触れていただきたいと思います。

懇親会：午後4時～ 会費：5,000円（当日受付でお納め下さい）

お知らせ

第七回人文の集い

講演：学ぶことで開ける世界

―アフリカ文学と絵本から―

講師：村田はるせ（50回仏文）

アフリカ文学研究者

期日：十月二十七日(土)

午前10時～11時30分

会場：富山大学人文学部一階

第一講義室

概要：アフリカ文学や絵本には
学びのさまざまな体験が
描かれ、「学ぶってこう
いうことなのか」と思い
ます。そうした体験を紹介し、アフリカをより身近に感じていただければと思います。

終了後、十一時五十分より隣接の第二講義室で昼食会を開きます。

講演は参加費無料ですが、どなたでも参加できます。昼食会は会費二千円（学生五百円）です。どちらか一方だけの参加も可能です。

「総会」「人文の集い」とも同窓会事務局へお申し込みください。同封ハガキもご利用ください。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

『同窓会名簿』の刊行について

平成二十九年度は『同窓会名簿』の発行の年でしたが、昨年五月の「改正個人情報保護法」の施行、近年の社会的動向、そして卒業生の意向などを勘案し、同窓会理事会において慎重に検討した結果、今回は刊行を見送ることとなりました。しかし今後も同窓生の皆さんの同意を得て『同窓会名簿』の刊行を続けていきたいものと考えています。なお同窓会員の連絡先など個人情報取り扱いについては左記のとおりですので、是非同窓生の皆さんのご理解をお願いいたします。

【個人情報の利用目的】

- ①『同窓会名簿』を作成し会員に配布する。
- ②同窓会関係の連絡にのみ使用する。
- ③その他本会の目的に即した各種事業の案内及び諸連絡のために使用する。

【個人情報の安全管理措置】

会員の情報は人文学部同窓会事務局で適切に管理する。

【個人情報の訂正】

本人の求めに応じて変更訂正または利用を停止する。

富山大学人文学部同窓会

会長 米原 寛

人文学部教員異動

退職

○吉田俊則（国際文化論）

○呉羽 長

（東アジア言語文化・日本文学）

○福家崇洋（国際文化論）

木下 良（元教員）

平成27年1月26日 紺谷 和夫（英文5回）

平成27年7月26日 澤崎 聖子（国文28回）

平成29年1月13日 島崎 暉久（ドイツ文学12回）

平成29年1月 高瀬 泰（英文4回）

平成29年11月11日 濱野 博峰（国文7回）

平成28年8月30日 二上（花田）初子（英文2回）

平成29年8月7日 松澤 芳郎（元教員）

平成29年3月31日 山田 伸子（人文地理学41回）

平成29年3月28日 吉村 正孝（史学9回）

平成26年3月12日 渡辺みゆき（英文17回）

一 訃 報 謹んでご冥福をお祈り致します。

年会費の報告

年会費納入状況をお知らせ致します。平成29年6月～平成30年3月まで、234名の方々から297,000円の年会費を納入いただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます

編集委員

田中 史子 谷口 恵子
成瀬裕美子 山藤 登
山本 孝一 畠山 節子